

CUC公開講座：労働観の表象と変遷に関する比較歴史社会学的研究（2024.12.20）

プロテスタンティズムの倫理と労働観の再編

——ヴェーバー『プロ倫』を再解釈する——

荒川敏彦

労働観の180度転換：否定から肯定へ

中世カトリックの労働観

否定的（罰として・苦役）



近世プロテスタントイズムの労働観

肯定的（救いの証しとして）

職業=召命観（神の召しとしての「天職」という思想）

全信徒祭司性にもとづく職業召命観

ルター **全信徒祭司性**（万人祭司）

「われわれは祭司である」（『キリスト者の自由』（1520年）16）

「みながみな祭司であれば、いったいキリスト教会における司祭と信徒のあいだにはどんなたぐいの区別があるのか」（同17）

平信徒の職業：ただひたすら「生活のための生業」であった

→ 神の召命として肯定的に把握され直す

すべてのキリスト者は「福音的勧告」の下に生きる祭司

→ 職業労働の場だけでなく、**生活全体**を祭司とする**生き方**

『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』

➤歴史における理念の作用

- 天職理念（Berufsidee：問題は概念Begriffでなく観念Konzeptionが問題）
- 確証思想（Bewährung：救いを確かめることができる）
- 予定説（Pädestinationslehre：救いと滅びはすでに定められている）

➤結論：合理的な生活態度・生き方（Lebensführung）の形成

「近代資本主義の精神の、いやそれのみでなく、近代文化の諸構成要素の一つである、**天職理念を土台とした合理的な生活態度は**——この論稿はこのことを証明しようとしてきたのだが——**キリスト教的禁欲の精神から生まれ出た**」（大塚訳：363-364）

競争に勝って人生で負ける

——プロテスタント的労働観の末路（1）——

「純粹に競争的な情熱」に駆り立てられ「スポーツの性格」を帯びた「資本主義の精神」の行き着く先が「人生の敗北者」だという逆説

➤『プロ倫』末尾で紹介された、オハイオ州の有力織物店主に嫁いだドイツ人移民女性の義父評

「この老人は、年々7万5000ドルの収入があるのに、仕事が休めないのだろうか。——できないのだ。こんどは倉庫の表を400フィートに広げなければならない。なぜだろう。——それがすべてのことを打ち負かす、と彼は考える。——夕刻に妻や娘たちがいっしょに読書しているのに、彼はいそいで寢床に入ろうとするし、日曜日には5分ごとに時計を眺めて、一日がいつ終わるかと待っている。——**まあ、人生の敗北者ですよ！**」（大塚訳：367-368）

人間的な「無意味さ」こそが光り輝く

——プロテスタント的労働観の末路（2）——

ピューリタンにとって、働く喜びを求めることは被造物の神格化にあたる。人間にとっての意味など問わず、神の栄光を讃えるザッハリッヒな職業労働こそが求められる。

「今日みられる労働の非人格性、つまり、**個々人の立場からみれば喜びが少なくまったく意味のないこと**が、そこでは**宗教的な光輝**をさえ与えられていたのだ。資本主義は、形成期には、自分の良心のために経済的搾取にも甘んじようとする、そうした労働者を必要とした。今日では、資本主義は鞍の上で安泰となり、来世という報賞などなしでも、彼らに労働意欲を強制することが可能なのだ。」（大塚訳：363）

天職観念の再転倒

- 職業労働への専心を**倫理的義務**とする「資本主義の精神」
 - 「怠惰」や「浮浪」 → 排除（取り締まり）と包摂（救貧院）
 - 宗教改革・宗教戦争の熱気が次第に治まってくる
 - 一度形成された秩序界で生き残る手段となった合理的生活態度
- 
- 単なる「生業」だった「**職業**」が、「**職業=召命**」となった後、宗教的高貴さを喪失し、倫理的義務を帯びた「職業」に。
 - **生活全体**を祭司とする**生き方**が、生活手段としての**賃労働**に

「ピューリタンは天職人たらんと欲した——
われわれは天職人**たらざるをえない**」

個人の生き方が「天職人」へと一元化された

この一元化をめぐるって

宗教による一元化

カトリック支配 → 罪を意識せざるをえなかった中世的労働観
宗教改革 → 労働を含めた世俗生活全体を神学的に肯定する

➤ プロテスタンティズムによる「生き方・生活態度」の合理化
天職労働は神への義務（**宗教的一元化**）



➤ もはや宗教的根基のない、倫理的義務としての職業労働
勤勉は家計への義務（**産業資本主義的一元化**）
勤労は国家への義務（**ナショナリズム的一元化**）

キリスト教によるジェンダー強化

- 中世：農村……人口の 9 割。女性は当然の如く就労
：自治都市……女性の地位が比較的高い（ケルンなど）
下層から上層まで多くの女性が就労
- 宗教改革：ルターやカルヴァンは、女性の教育を重視
労働や公的活動には**保守的**（創世記講解、創世記注解）
男性性：信仰、労働（業績）、家族（の統治）
女性性：従属性。敬虔な妻や母になること
→ 召命の**確証**を他者に対して確立しにくい

一元的競争でない多元化に向けて

➤救いの確証

- **対自的**確証（自己の確信）で十分 → 「宗教的達人」には可能
- **対他的**確証（他者にも「救いの証し」が見える）
 - 規律化した生活態度
 - 天職労働の結果としての世俗的成功

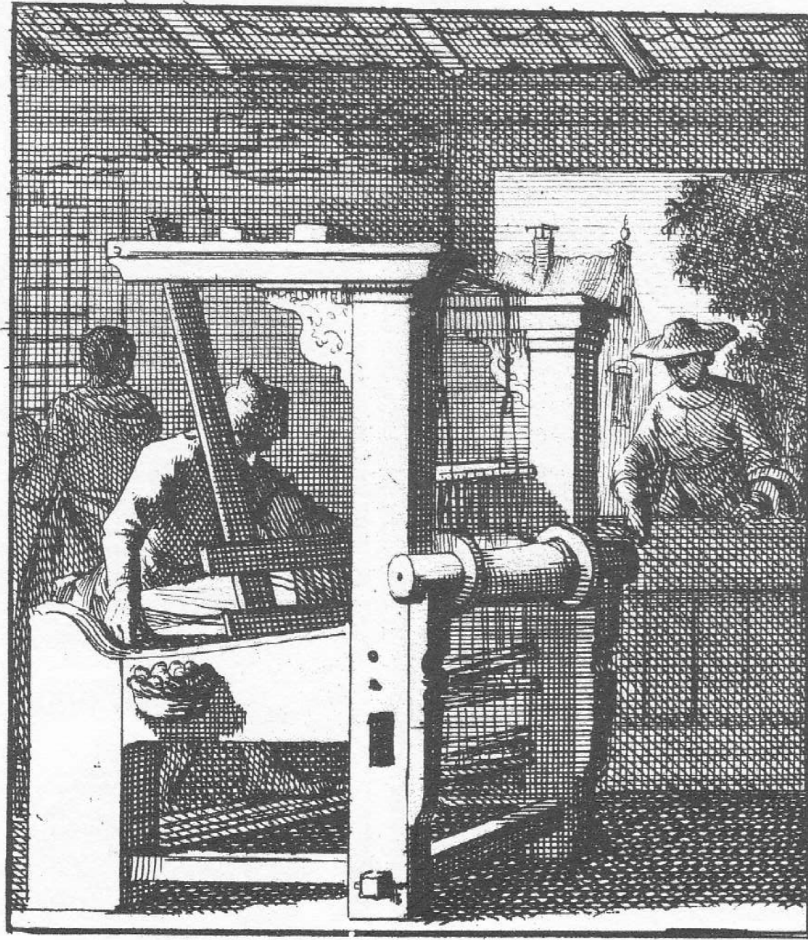
➤他者からの承認による **アイデンティティ** の確立

- 同一評価基準上における他者からの承認 → 一元的業績競争
- 匿名の（対等な）他者からの承認 → SNS ?
- 自己にとって**重要な他者**からの承認 → 多元化

近世オランダの労働風景 (17世紀後半、庶民)

16. 織り物師

織物に集中する者は
人生という網を編んでいる



左奥の女性は
紡績担当か

23. ピン職人

賢き決断は、遠く先を見越す



足を組んで座
るのが定番ス
タイル

41. 油屋

心の油を搾り出せ、敬虔の光をまたたかせる油を



68. 漂白工

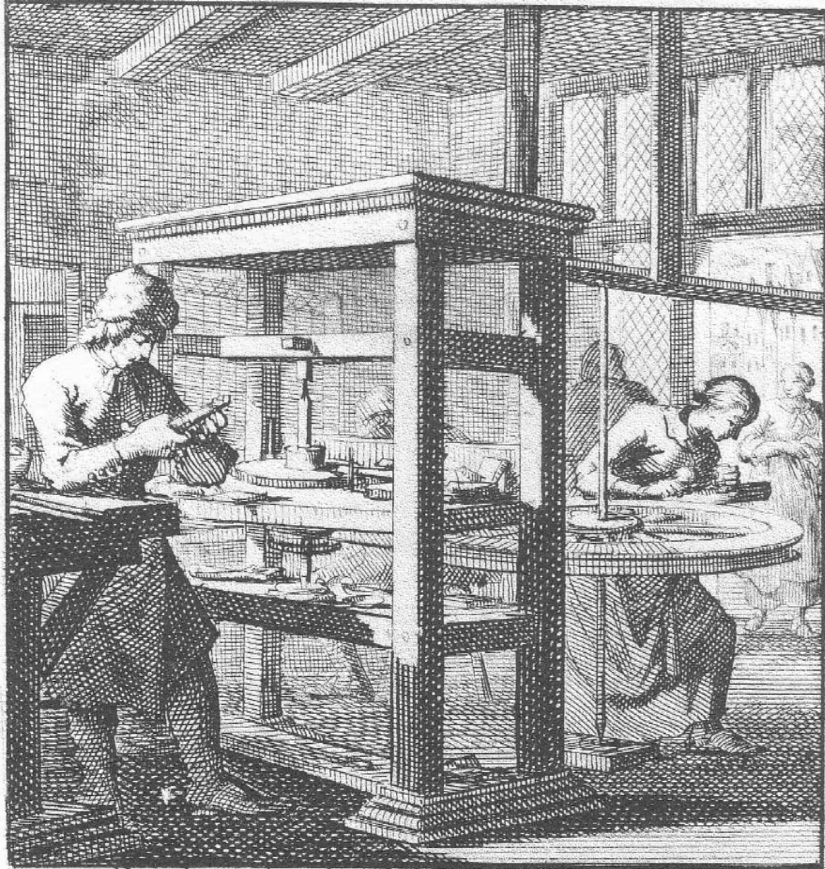
魂の衣を汚す者に、
清潔を誇る資格なし



当時、オランダは亜麻布（リネン）の集積地。奥で女性が袋詰めをしている姿が見える。

80. ダイヤモンド細工師

ダイヤは、永遠の泉から採った小さき滴



92. 説教師

すすんで永遠の幸せを求める者は、
一日じゅう自らに主の教えを説ききかせる



(参考) 女性は説教壇に上がったか？

カルヴァン派の秘密集会や1572年以前の改革派教会の正規の礼拝式において、説教師が来るまでの間に、みずから説教壇に登り、聖書の講読を行った女性の例〔がある〕(Davis, p.117)

文献

- 荒川敏彦（2020）『〈働く喜び〉の喪失』現代書館
- Davis, Natalie Zemon, 1975, *Society and Culture in Early Modern France. Eight Essays by Natalie Zemon Davis*, Stanford University Press. (=成瀬駒男訳（1987）『愚者の王国 異端の都市』平凡社
- 姫岡とし子（2004）『ジェンダー化する社会』岩波書店
- —————（2024）『ジェンダー史10講』岩波書店
- 今村仁司（1998）『近代の労働観』岩波書店
- Luiken, Jan (1694) *Menselyk Bedryf*. (小林頼子編訳・池田みゆき訳（2001）『ヤン・ライケン 西洋職人図集——17世紀オランダの日常生活』八坂書房)
- Luther, Martin (1520) *Von der Freiheit eines Christenmenschen*, Studienausgabe, Reclam, 2011. (=徳善義和訳（1996）『キリスト者の自由』『自由と愛に生きる——「キリスト者の自由」全訳と吟味』教文館)
- Weber, Max (1920) “Die protestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus”, (2016) *Max Weber Gesamtausgabe*, MWG I/18, J.C.B.Mohr. (=大塚久雄訳（1989）『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波書店)